

ファリード・ザカリア著「民主主義の未来 - リベラリズムか独裁か拝金主義か - 」

阪急コミュニケーションズ 2004年8月26日刊を読む

1. アングロ・アメリカンのエリートは、高慢な家父長的態度と、生まれつきの文化的な優越感をただよわせている。そうした昔ながらの雰囲気をあざ笑うのはやさしいが、彼らは一定の価値観、つまりフェアプレー、品位、自由、プロテスタントの使命感を身につけ、それを社会生活の規範にすることに貢献してきた。もちろんこれらの倫理規範は人為的で自民族中心主義的なもので、偽善的な場合もある。しばしば悪用され、履行されるよりも破られることのほうが多い。とはいえ歴史家のジュン・ルーカスが指摘するように、「偽善は、文明を統合させるセメントである」
2. 社会の基準は社会生活の最高の願望を表したものであり、複雑な現実を反映したものではない。権力をもつ人々はある一定の行動基準を認めると、自分の権力を間接的にせよ制限して、社会に対して「これこそわれわれが努力していることだ」とシグナルを送る。
3. (1) アメリカのエリートに対するわたしたちの考え方の変化は、次の一例で説明できるかもしれない。
(2) 映画の『タイタニック』と歴史的事実との間にあるちがいのなかで、特に指摘しておかねばならないことがある。映画では船が沈みだすと、一等船室の船客は先を争って、限られた数の救命ボートに移ろうとする。しかし屈強な船員が銃を構えて、貪欲な金持ちたちを寄せつけず、女性と子どもからボートに移る。
(3) しかし生存者の証言によると、「女性と子ども優先」の申し合わせは、上流階級の間では守られていた。それは統計資料からも明らかで、一等船室では子ども全員が救助され、女性 144 人のうち 5 人を除けば全員が助かった。死んだ 5 人にしても、そのうち 3 人は夫と運命をともにすることを選んだのである。それに対して一等船室の男性の 70 パーセントが命を失った。また裕富な専門職が多かった二等船室でも、女性の 80 パーセントが救われ、男性の 90 パーセントが溺れ死んだ。
(4) タイタニックの乗客リストにあった一等船室の男性客は、当時の経済誌『フォーブズ』の高額所得番付 400 人に入っていた。アメリカの大富豪といわれていた毛皮商人ジョン・ジェーコブ・アスターは、やっとボートまでたどり着いて妻を乗せると、自分は退いて、妻に手を振り最後の別れをした。ベンジャミン・グッゲンハイムもボートを断って女性に席を譲り、家へのメッセージを託した。「わたしの妻に伝えてください…。最後までゲームを闘った。この船には女性はひとりも残っていないはずだ。ベン・グッゲンハイムは臆病者だったから」
(5) つまり世界で最も権力のある者の中には、たとえ死が確実であっても、名誉の規範を固守し

ようとしたものがいたのである。

(6)映画制作者がこうした事実を曲げて描いたのには、その相応の理由がある。今日ではそんな史実は信じられないからだ。上流階級の人々から責任感を取り除いてしまえば、現代のわたしたちとまったく変わらず、普通の人になってしまう。社会が民主主義化しダイナミックに動いているため、エリートの支配階級など存在しないかのように思える。しかし実際は存在するのだ。

4．豊かな者、力ある者はつねにわたしたちのかたわらにいる。彼らに対しては特権には責任がともなうことを認識させなければならない。社会のしきたり、職業団体、道徳上の拘束、プレッスルール、紳士の掟などはすべて、強者を教化しようとする試みだった。過去のアメリカ社会では、男女が礼儀正しくふるまい、社会生活に参画することが求められていた。

5．ワシントンのイーストポトマックパークの近くには、キリストのように両腕を広げた男性の肖像が立っている。その台座には、「タイタニックの勇氣ある男性たちに捧げる。彼らは女性と子どもたちを救うため、自分の命を投げだした」とある。この男性の像は、全米2万5000の女性たちからの募金で建てられたものである。

6．かつては社会で指導的立場にあった者は、自分の理想に生きれば尊敬された。そうしなかったときは、彼に対してみなが深い失望感を味わった。それに比べて現代では、権力をもつ人々にわたしたちはほとんどなにも期待していない。だから彼らに、失望も感じない。

[コメント]

先日、経済同友会の友人である小林恵智氏より「使命」とは何か、どのような意味かについて教わった。使命とは漢字で「命を使う」という意味だそうだ。自らの命を使い目的や目標を達成することが使命に基づいた行動ではないかと思うようになった。民主主義の未来を担う人はこのような意味で、自らの「使命」を果たす人であると思う。

- 2010年6月21日 林明夫記 -